

ちょっと人権 めざめる女 つぶやく男

人権教育セミナー短信 No. 4 平成 18 年 8 月 4 日
学校支援部 人権教育担当

めざめる女 つぶやく男！ 号

第5講座 女性と人権 ～参加型学習～

【富田林市人権文化部 次長 浮穴正博さん】

浮穴です！

今日は第5講座。ちょうど折り返し地点です。予算の関係で今年の県外講師は4人しかいませんが、その1人が今回の講座で大阪富田林市からお招きした浮穴正博さんです。浮穴さんは昨年度まで富田林市の中央公民館に勤務され、平成7年からの9年間、継続して「女性学講座」を開催してきた方です。単なる9回の講座ではありません。1年の講座は10回が1セットとなっているもので、しかも金香百合さんのような講師と年間を通して学習できるという、人権教育担当者としては垂涎物の講座を企画・運営してきた方です。

「わたしはワークショップをする人ではなく、してもらう人です。」と浮穴さんは謙遜していましたが、いやいやどうして……。魅力的な講座となりました。



1 人権教育について思うこと



前夜の懇親会と同様、Tシャツにジーンズというラフなスタイルで講座に登場した浮穴さんは、現在 58 歳で団塊の世代。「男性」である浮穴さんが、女性と人権について、どう切り出すのかと思っていたら、かつてご自身が経験した、「人権感覚のなさ」「感性のにぶさ」に起因する失敗談を開示することからスタートしました。なりたくなかった解放会館（県内で言えば市民会館や隣保館）の職員時代に経験した識字学級生との話（40 歳代で識字に入った学級生は、本当は自分の名前と住所を漢字で書けるようになりたいがために学級に入ったのに、「あおいそら、しろいくも」という教科書にある教材を使って「ひらがな」の練習からスタートし、ずっとそればかり半年間も続けてしまった話）、友人たちとカラオケの最中に、その場の流れで「母校の高校の校歌」を歌うことになった話（その中の一人に「中卒」の人がいたにもかかわらず、その流れを止めることができなかったという話）など、同じ状況下なら、誰もがそうしてしまいそうな事例を挙げ、まずは「気付きと、そこからの歩みが大切である」ことを私たちに伝えてくれました。

☆☆☆ 声なき声を聴ける「想像力」を持ちえているか？ ☆☆☆

浮穴さんは社会教育主事でもあり、その立場からも提起をしてくれました。「学校の先生は、もうちょっと考えなあかん。子どもが学校へ来るのが当たり前と思ってんのとちやいますか？わたしら社会教育してる者は、人を集めるところから始めなあかんのですよ。」「学校で、ちゃんと人権教育やってくれたら、社会教育で人権教育をやらんでもいいんですよ。」……こんなことを冗談半分、本気半分で話しながら、教育に携わるものには「想像力」が不可欠であると訴えられました。



☆☆☆ ワークショップは形式ではない！ ☆☆☆

残念なことですが、今回の講座は要項に「ワークショップ」と銘打ったためか、受講者が最小となってしまいました。講座の評価は5点満点中4.2点と高かっただけに担当者として「もったいないなあ。」と心底思いました。「ワークショップ言うても付箋や模造紙を使うたりしません。」とおっしゃったとおり、進行の仕方はオーソドックスなものでした。浮穴さんと受講者の、また受講者同士のコミュニケーションを通して、それぞれの持っている力を引き出す、つまりエンパワメントそのもの！といった感じのワークショップでした。印象的だったのは、「わたしはお世話になる講師を〇〇先生とは呼ばんようにしています。〇〇さんと呼ぶんです。呼び方によって、できる関係が違ってくるんですわ。」というフレーズです。終日ステージではなくフロアで話されましたし、物理的にも心理的にもフラットな関係を意識しているな！と感じさせる方でした。



2 ジェンダーエッセイ集「めざめる女 つぶやく男」から

大阪府教委を通じて文部科学省から富田林市に「まちづくり支援事業」の委嘱の話があり、浮穴さんは実行委員会の事務局として取組を進めてきました。紙面の関係でその経緯の説明は省きますが、これをまとめた冊子には、なかなか「おもしろエッセイ」が満載です。受講者から「あつ、それうちと同じや！」「うーん、これは考えさせられるなあ……」という反応が多かったものを、ちょっと紹介してみましょう。

◆妻の下着(もの) 干す夫(ひと)の背に 姑(はは)の顔

実はこれ、浮穴さんの連れ合いさんの作品です。人権教育担当チームも「これはよく分かるなあ。」と思わずうなっていました。この裏話をしていく中で、普段は別に暮らしているご両親が家に來られたときの話をしてくれました。浮穴さんは普段やっているからということ、この日も当たり前前にゴミを出したり、洗濯物を取り込んだりしてしまし

た。するとそれを見た連れ合いさんは「今日だけはやめて！」という顔をして、ものすごく嫌がっていたという話です。女性の受講者が「分かる分かる・・・。」と言いながら大きくなずいているのが、印象的でした。

◇時代遅れ

最近、やっと男子トイレにも赤ちゃんを座らせておくベルト付きの椅子が備えられるようになりましたね。担当者は「これはいいことだ！」と感心していましたが、その商品名を見て思わず、ガックリ・・・。「備え付けられている」という事実について男性は、大きな量販店に行ったときなどに見て知っているという人が多かったのですが、男子トイレに入るのでもない女性はほとんどが「ああ、そうなの！知らなかった。」という反応でした。しかし、商品名を知った時の反応は共通していました。よりによって「お母さんの椅子という意味の商標（「お母さんのひざ」みたいなものもあるらしい!）」とは・・・。画竜点睛を欠くとは、このことですね。

◇流し台の食器たち

彼氏の家に行った次の日の朝、彼氏より遅く家を出るとき、流し台にある食器が目にとまった彼女。「洗わなきゃ、でも遅刻してしまう・・・。」と戸惑ってしまう。その食器は全て彼が使ったもの。時間がないから家を出た彼女だが、女として失格という罪悪感のような、悲しい気持ちに襲われ涙を流したという話です。気付かないうちに「気のきく彼女」を演じている自分に気付いたという内容なんです。この事例には共感したという女性が多かったですね。

紹介したいエッセイは、この他にもたくさんあります。これらを題材にして「意味ある雑談」をする。それだけでいろいろな気付きがあるでしょうし、自分の体験を併せて開示していけば、さらに深まると思います。研修となると形式ばって硬くなりますが、こんな気軽な形で同僚やパートナーと雑談してみることをお勧めします（ひょっとして、パートナーとは話す勇気がないという男性が多いのかなあ？）。



3 家事分担考

浮穴さんは結婚した当初は『家事分担』が男女（夫婦）平等の最も重要な要素である」と思っていたそうです。しかし、徐々に疑問に思うようになっていきます。浮穴さん曰く『めざめた女性』は、世間や男たち（時には女をも含む）から攻撃されながら、また疎まれながら圧倒的な敵と対峙しながら生きているんですよ。家事をしても当たり前のこととして評価はされませんよね。その一方で『家事ができる男性』は、世間や女性から『いい旦那さんやね!』などという評価を受けますよね。この男性が評価された分だけ、そのパートナーである女性は『楽をしている女性』に降格させられているとちやいますか？」

「家事分担は必要。本来、生活の当事者である全員が担うべきものを、片方の性に押し付けてきた量的な不公平を公平に戻そうとする行為に過ぎない。」と浮穴さん。「家事分担をすることによって男性が『平等の実行者』であると勘違いしてしまっているようだ。」とも言われました。結論として私たちに突きつけたのは、次のことでした。

～ 家事分担とは、性に基づく絶対的な力関係を見えにくくするために、男たちが考えだした、男女平等の似て非なる虚像ではないだろうか ～ 思わず考え込んでしまいました。



4 受講者及び担当者の感想から

★男は男であるということだけで権力である。それを武器に生きている。今までそんなことは意識してこなかったが、浮穴さんと共に学んだことで、「そうなんだ」と思うようになった。確かに男である私は、ジェンダーについて悩んだりしんどい思いをしたりすることはなかったなあ。ということは、つまり、このことに関する感性を磨くこともなかったということになるんだなあ。

★大切なのは「想像力」。そのとおりだと思う。「この人にとって今何が大切か」を考えること。自分の中での当たり前が、今日、浮穴さんの話を聴いて、なぜかとても新鮮に感じました。きっと私のこれからの感じ方、想像力も変わるかな？

★こんなに真剣な気持ちでジェンダーについて考えたことはなかった。私自身女性であるのに「女性がやるのは当たり前」と思うことがたくさんある。でも今日のお話が聴けて少し違った見方ができるようになった気がする。



★「めざめる女～」をもとにした協議のとき、各参加者の置かれている立場や家庭生活なども開示しなければならず、ほとんど初対面の方の中なので最初は抵抗があったが、徐々に本音が出始め、最後は楽しい討論となった。自分自身を振り返ると「良い夫」を演じていた自分、それが思い上がりであったことに気付いた。今後は「家事分業」ではなく「生活協力者」でありたいし、「理想の夫」でなく互いを思いやれる「理想の夫婦」でありたい。